

2026年2月

第185号

# ぱれっと



㈱北日本ベストサポート  
TEL 018-883-1888

## 真冬の衆院選

冬の寒風がまだ国土を包む中、日本は例年のない「真冬の短期決戦」となる衆議院総選挙に突入している。日程は公示が1月27日、投開票が2月8日と発表された。これは戦後最も短い選挙戦になる。

2025年末から与野党で揺れが続いた政治情勢のなか、高市早苗首相は1月23日に衆議院を解散し、早期総選挙に突入した。これは就任から間もない政権として、いわば今の支持基盤を確かなものにする最大の政治的賭けともいえる。背景には物価高対応や経済刺激策、税制・財政のあり方、防衛政策など、与党・政府が掲げる政策パッケージへの国民の「信任」を確認したいという狙いがあるとされる。

2月の選挙は、首相の高い支持率を背景に決断したように映るが、一方で立憲民主党と公明党が「中道改革連合」を結成し、これに対抗する構図となっており、高市首相も予想外の展開になったようにも映る。豪雪地域では地域ごとのさまざまな細やかな工夫と苦勞が生じており、配慮が求められている。これは特定の年齢層(若年層・高齢層など)や地域(豪雪地帯・地方都市など)の投票行動に差が生じないように工夫が必要である。

与党側、特に自民党は今回の選挙を「政策の信任を問う選挙」と位置づけている。物価高対策、経済政策、国防力強化などを柱とする政策の実行力を訴え、連立を組む日本維新の会との協力体制で過半数維持を目指す戦略だ。

対する野党勢力は、政府・与党の政策に異なるアプローチを提示しようと躍起だ。特に大きな動きを見せたのが、立憲民主党と公明党の衆議院議員が中心となって結成された中道改革連合である。与党への不満はあるが、急進的な改革には不安がある。かといって、理念先行の政治にも距離を置きたい、そうした有権者の「ためらい」の集積点に、この連合は立っている。

他の野党勢力は独自に単一争点を鋭く打ち出し支持を集めようとしている。彼らを選ぶ有権者は、必ずしも政権交代を求めているわけではない。むしろ、この声だけは消さないでほしいという切実な思いを託している。今回の選挙戦は、これらの政党にとって拡大の機会であると同時に、役割を再定義する局面でもある。主張を貫くのか、現実政治との接点を広げるのか。その選択が、選挙後の立ち位置を大きく左右する。

今回の総選挙は、単なる議席数の増減だけでは済まない可能性がある。政界再編の端緒となるのか、中道勢力と野党勢力の結集・分裂が進むのか、あるいは与党内部で新たな枠組みが生まれるのか。選挙後の政治地図が描き直される節目となる可能性が取りざたされている。

短くも濃密な選挙戦が始まった。この冬、日本の政治はどのような結末を迎えるのか。選挙戦の争点や国民の意思は、とりわけ若い世代や地域差のある投票率を通して、今後の国政運営に影響を与えるだろう。



## 志を最優先する

事業や学問でどんなに大きな功績を残しても、その人が死んでしまえば、それも終わってしまう。

しかし、築き上げてきた精神は、その人が死んでも、時代が変わっても、後継者に脈々と受け継がれていくものだ。

名誉や財産は、時代とともに移り変わるが、人間の信念や志は、後の世までずっとたたえ続けられるものである。

功績や財産、地位や名誉に心を奪われ、自らの信念や志を曲げるような愚かなことをしてはならない。

(前集 147)

## 悪い状況にあっても品格を保つ

みすぼらしい家の庭先がきちんと掃き清められていたり、貧しい家の娘がきれいに髪をとかしていたりする光景を見ると、外見はたしかに華やかではないが、それなりに風情を感じるものだ。

だからこそ、たとえ経済的、精神的にどん底の状況に陥っても、自暴自棄になってはいけない。

品格だけは失わないよう心がけるべきである。

(前集 84)

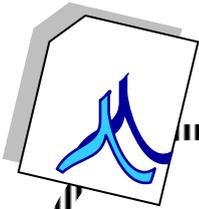
## ちょっとした迷いを見過ごさない

自分の心に欲が出てきたと感じたら、すぐさま無欲・無心の正しい道に戻るよう、自分を戒めなければならない。心の中に少しでも迷いが生じたら、その心を直視し、すぐに改めることだ。

このように心がけていれば、大事に至る前の小さな問題のときに、わざわざの芽をつみ取ることができる。

つまり、ちょっとした迷いでも見逃さなければ、わざわざも福に転じ、起死回生のチャンスをつかむこともできるのである。

(前集 86)



## 和井内貞行 (実業家、秋田県十和田湖開発の先駆者)

### われ、幻の魚を見たり

1858年2月15日



南部藩領陸奥国鹿角郡毛馬内村(現:秋田県鹿角市)で、南部藩重臣毛馬内陣屋城代桜庭氏の筆頭家老職を代々務めていた父和井内治郎右衛門貞明、母エツの長男として生まれる。武家の子として厳しく育てられながら、明治維新の動乱における盛岡藩と秋田藩の戦争や敗北を幼くして経験しながら、郷里・毛馬内で成長。

1866年(慶応2年)

9歳。盛岡藩の儒学者・泉沢恭助の塾に入門し学問を修める。

1878年(明治11年)

鎌田倉吉氏の長女・カツと結婚。

1881年(明治14年)

工部省小坂鉦山寮史員として就職。十和田湖鉦山詰。

1884年(明治17年)

十和田湖に魚を棲ませたいという夢を抱き、養魚を決意。

鯉の稚魚600尾を十和田湖に放流。

1896年(明治29年)

はじめて鯉を捕獲。小坂鉦山を辞し養魚に専念する。

1897年(明治30年)

湖畔に旅館観湖楼を建て、湖の観光宣伝をする。

1899年(明治32年)

サクラマスの卵を孵化させ5000尾を放流。

1903年(明治36年)

ヒメマスの孵化に成功。約3万尾の稚魚を十和田湖に放流。

1905年(明治38年)

ヒメマスの大群が湖岸に回帰。養殖に成功。

「われ、幻の魚を見たり」と語った。

1916年(大正5年)

生出に「和井内十和田ホテル」をオープン。

湖畔に訪れる人々を迎える体制を整え、観光と水産の両輪によって地域の未来を切り開く。

1922年(大正11年)

死去。享年64台歳。十和田湖大川岱の勝漁神社に祀られる。

1950年(昭和25)

和井内貞行をモデルにした映画「われ幻の魚をみたり」公開。

## オススメのBOOK



### 「後継者不足時代の事業承継 当事者の視点で考える」

著者大塚久美子・集英社新書

著者は大塚家具の経営権を巡ってニュースになった大塚久美子氏で現在は株式会社クオリア・コンサルティングの代表取締役社長を務めている。本著では、自身の経営者としての実体験を背景に、単なる理論や制度の解説に留まらず、当事者の心の動きまで丁寧に描いており、強く印象に残る。特に、家族や創業者の価値観、個人の人生選択がどれほど事業承継に影響するかが明確に描かれている。単に後継者がいないという数の問題ではなく、事業をどう未来につなぐかという根本的な問いが、当事者の心の奥底で渦巻いていることに気づかされた。

## 長時間運転による疲労 ～疲れにくい運転姿勢とは～

ドライバーは運転時間が長いほど疲労を感じます。疲労の原因には「認知・判断・操作」といった運転操作の繰り返しや、緊張状態の継続による肉体的・精神的負担、単調な運転が続くことによる意識の低下や車の振動など様々なものが考えられます。

疲労を軽減するためにドライブ計画においては適切なタイミング・場所で休憩を入れることが大切ですが、もし疲労の溜まりやすい運転姿勢になっている場合は、それを見直すことも対策になりえます。例えば背中や足の一部に力が入り続けるような姿勢やシートが身体の一部を圧迫し続けるような状態は、筋肉疲労、血行不良などを起こしやすいと考えられ、改善の余地がありそうです。



### 疲れにくい運転姿勢とは…

疲れにくくする（＝体にかかる負担を軽くし、快適さを保ち続ける）ために、まずは正しい姿勢で運転することが重要です。

1. シートに深く座り、座面の高さを前方死角が小さくなるように調整。
2. シートの前後位置を、ブレーキペダルを強く踏み込んだときに足が伸び切らず余裕ができるような位置に調整。
3. 背もたれの角度を、ハンドルの頂点を握ったときでも肘が伸び切らないような角度に調整。

ご自身のベストな運転姿勢・シート位置を探してみてくださいはいかががでしょうか。

### 【編集後記】

日本列島は各地で大雪に見舞われた。豪雪地帯とされてきた日本海側だけでなく、これまで雪に慣れていないとされてきた地域でも交通網が麻痺し、物流が止まり、日常は簡単に崩れたしまった。除雪体制は十分か、福祉と防災は連動しているか、孤立する高齢者を把握できているか。大雪は自然災害であると同時に、地域の弱点を可視化する鏡でもある。「この地域で生き続けるために何が必要か」そんな自然からの問いに向き合いながら暖かい春を待ちたい。